

誕生花をあなたに～いつもを添えて～

みうみん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比企谷八幡誕生祭2018SS

目次

誕生花をあなたにくいつもを添えてく

## 誕生花をあなたにくいつつもを添えてく

日付けが変わった。現在の時刻は8月8日午前0時。

普段ならこんなことに気を配ってスマホの画面を見ていることはない。なのにどうして俺がスマホとにらめっこしてるかというところの通知がうるさいからである。

別にリア充じゃないしぼつちだし、相手いないし、小町だけでいいし、既読スルー怖いし……

それなのに強制的に友達登録してしまった。連絡先持つてたやつ全部追加された。そして連絡先交換してなかったやつとはラインを交換された。恐るべしライン……

ラインを始めた当日はまた黒歴史の1ページを捲ってしまった気がする。友達かも?とか友達として追加されたって相手側には通知がいくらしい。いや勝手に追加するなよ。許可を得ろ。許可を。

『え?ライン始めたの?』『よろしく!』とか、『ウケる笑』とか。いや、ウケないから。なんにも面白くないから、こっちはライフを削られてるから。そんな感じだった一言送られてくる。どういう風に返信すべきか何時間か悩んだ末に、『よろしく』と無難に返してしまった。絶対あいつら画面見ながら笑ってる。馬鹿にしてる姿が目につかぶ。

俺の新たな黒歴史は良いとしてラインを見ていく。

お団子頭のクラスメイトからは、

『ヒツキー誕生日オメデト!! 〃(・ω・)ノ イエイ!!(h)(a)(p)(p)(y)?(\*?、\*?)? (b)(i)(r)(t)(h)(d)(a)(y)これからもよろしく!〃(・ω・)ノ』

というのが、いや顔文字使いすぎだから。わざわざ英語でも言わなくていいから。なんかネット始めたばかりの中年みたいになってるから。いや、逆にこれがリア充というものなのだろうか。でもこの間パパが顔文字とかスタンプ全部使ってくるからウザイって言うってたような……リア充コワイ。

あざとい後輩からは、

『せーんぱい。お誕生日おめでとうございます♪これからもよろしくです!』

『あつ、今ニヤケました?こいつならイけるって思いましたよね?わかりやす過ぎです。下心丸出しの死んだ魚のような腐った目をした人は守備範囲外なのでごめんなさい。』

おい!目は関係ないだろう!目は!てか、なんで俺が勝手に告つてもないのにフラれたみたいになってるんだよ。何回お前にフラれればいいんだ。やめて!八幡のライフはもう0よ!

厨二病さんでも見て少し落ち着きますかね……

『我が同胞、比企谷八幡よ!今日はお主の誕生祭だな。我は嬉しいぞ。盛大に祝おうではないか。また我の密書を読むが良い。我はこれで失礼する』

おつおう。いつにも増して意味不明なことを言つてやがる。今回の設定はなんだったのかな?材木座。密書つてどうせまたお前が執筆しているラノベだろ。密かに書いてないし、秘密にされてもないし、なんならお前から広めてるまである。

落ち着くどころか呆れてしまった。次は……

『比企谷誕生日おめでとう。君もまたひとつ私の歳に近づきましたね。君が私の歳に近づくということとは私も歳をとつて君の歳から離れるということですね。近づけば近づくほど遠くに感じる恋みたいですね。p.s. 今度一緒にラーメンでも食べに行きませんか?』

ボンツ。唐突!布団にスマホを投げてしまった。うん。見なかったことにしよう。そうしよう。残念系独身教師様は今宵も健在なご様子。なんなんだこの乙女は……ラーメンならいつでも行きますから。てかほんと誰か貰ったげて!じゃないと俺が貰っちゃいそうになるから。

落ち着け!。落ち着くんだ比企谷八幡。誕生日は始まったばかり、ここで倒れるわけにはいかんだよ。ここはラブリーマイエンジェルから来たのを見よう。

『八幡誕生日おめでとう!』

なんとということだろう。一言、たった一言なのに癒される。画面越

しから出る電磁波をも凌駕して癒しの波動でも出ているのだろうか。  
ああ……とつかわいいって思ってたらなんかもうひとつ来てた。

『おめでと』

素っ気ない。何がおめでたいのかわからない。相手に伝わるように  
にって教わらなかつたのかしらん？俺が言えることじゃないけど。  
なんか自分で言っときながら悲しくなってきた。俺のことは後にし  
て、その一言を送ってきたのは川なんとかさん。まああいつらしいと  
言えばあいつらしい。素直に嬉しい。他の言葉に頼るでもなくおめ  
でとうの一言だけに込められた何かを感じる。そう思うのは俺の過  
信だろうか。とりあえず返信しとこう。

『さんきゅ』

うん。我ながらスマートな返しだ。自ら感心してしまう。

『はーちゃんお誕生日おめでとー！』

ふあ？もうそろそろスマホから目を離そうと手放したと同時にそ  
の言葉は送られてきた。こっ、これはまさか!?

『ごめん。けーちゃんがあたしのスマホ取って勝手に送った』

『ああ。気にするな。京華にありがとうって言っといてくれ』

『ほんとあんたって京華には甘いよね』

『うっせ！祝福されたから礼を述べたまでだ！』

『はいはい』

なんか。幼女のおかげ？で会話が続いてしまった。けーちゃん可  
愛いわ。幼女に誕生日祝われるとか生きてきた中で初めてである。  
やっぱり幼女は最高だぜ!!うん。キモイな。

送られてきたラインは川崎姉妹からのので最後だった。別にこれか  
ら誰かから祝福される予定はもうない。小町を除いて!うん小町は  
祝ってくれるからね!

これは俺の独り善がりな、一方的な幻想。考えるのはやめろ。期  
待をするなど頭のどこかでブレーキがかかるが、どこかで期待してい  
る自分がある。酷くもどかしい。

もやもやした気持ちを胸に俺は意識を手放した。

目を覚ました俺は、我が親愛なる妹の待つリビングに向かう。入ったらキッチンで朝食の支度をしている姿が目に入った。

「おはよう。小町」

「あつ、お兄ちゃん。おはよー」

うん。至って普通だ。今日が何の日かわかっているのだろうか。まさか妹に忘れられてしまったというのか!? 嘘だ! 嘘だと言ってくれ誰か。そう誰か……

「はい。できたよ召し上がれ。」

「おう。さんきゅ」

テーブルに並べられたのは鮭の塩焼きに大根の味噌汁、カブの漬け物に玉子焼き。素晴らしい。家庭的な朝食。うちの妹はいつでも嫁に出せるね!! 出さんけど!! 絶対嫁にはいかせないから!!

妹パワーを注入した俺は今、録画してあるプリキュアを一気見していた。HUGっと! しちやう。ぷいきゅあがんばれ〜!

ピンポンと家のチャイムが鳴った。誰だこんな時間に。出るのは小町に任せよう。てか、もう小町が向かってるし。

「お兄ちゃんお客さん♪」

ぴよんぴよんと心がぴよんぴよんしてしまいそうなまでに明るい向日葵のようなスマイルでこちらに向かってきた小町。

「おう。そうか良かったな」

「いやお兄ちゃんにだから」

「は? 俺に? いつ? 誰が? どこに? なんの用事で?」

「ほんとめんどくさいごみいちやんだなあ。いいから行った行った」

まるでゴミを見るかのような蔑んだ目で俺を見据え、シツシツと手で俺を向かわせようとする小町ちゃん……お兄ちゃん悲しいよ。仕方ないので玄関に向かう。誰だよ! 俺の朝の癒しを邪魔するのは! プリキュア観るのが生きがいだってのに。いやそれは言い過ぎか。

玄関を開けるとそこにいたのは……

「おっおっ、なんでお前が……」

「あら？私が訪ねてきたらおかしいのかしら？それよりも何その鳴き声は？新種のセミが鳴いているのかと思っただわ。こんなに暑苦しい日なのにさらに暑くなるような鳴き方はやめてもらえるかしら」

「おい！俺はセミじゃねえし。頑張つて命燃やして鳴いてるセミに失礼だろうが！俺はそこまで命を懸けて生きるつもりはない。てか、どうしたんだこんな暑い日に。俺に用だと聞いたが？」

会って早々俺を罵倒してきたのは言うまでもない。氷の女王雪ノ下雪乃だ。水色のフェイクスエードコートを羽織り、白と黒のボウダー柄のバルーンスリーブカットソーにベルト付きタックパンツという高校生とは思えないほどの大人顔負け上品なコーディネート。やっぱりこいつはパンツスタイルが良く似合うな。

「あら？私のことをずっと見つめているけどどうしたのかしら？視姦谷くん？」

「もうそれほとんど合っていないから。視姦してないから。ただお前の服装を見て綺麗だなって……そう思っただけだ」

勇氣というかなんかを振り絞って俺ができる最大限の褒め言葉を言った。

「そつ……そう。ありがとう……」

「おっ、おう」

なんか変な空気になってしまった。また冷え切った目でこちらを見て罵倒してくるのかと思っただら、少し頬を染めながら俯いたままだ。おい！恥ずかしがるな！こつちまで恥ずかしくなるだろ！ちくしよう。

「ん。あー。ところでなんの用だ？」

堪えきれず俺からもう一度要件を尋ねた。

「そつ、そうだったわ。その……今日は何の日か知ってるかしら？」

「ほえ？」

「また変な声を出さないでくれるかしら。近所の人に聞かれたら私まで変な目で見られてしまうじゃない。」

「うっ、うるせ。えーと」



「世界猫の日よ」

俺が答える前に焦れつたかったのか割り込んできた。

「世界猫の日?」

「そう。国際動物福祉基金。通称IFAWが制定した日よ。何故この日なのかという具体的な理由は調べてもわからなかったわ。ちなみに日本の猫の日は2月22日よ」

おっ、おうさすがユキペディアさん。詳しくていらっしやる。なんか顎を少し上げ腕を組んで自慢げにどう?という視線を送ってきてる。

「知らなかったな。それでそれがどうした?」

「だからその……」

持っていたバッグからチラシを手を取って見せてきた。

「これと一緒に付いてくることを許すわ」

「世界の猫展?」

「ええ。世界各国のたくさん種類の猫が私たちを待ってるわ」

「さいですか……」

「ちなみに行かな——」

「あー、お兄ちゃん雪乃さんをしっかり守ってあげないと晩御飯抜きだから☆」

トタトタと近づいて来たと思ったら恐ろしいことを言う小町。

「よし。雪ノ下行くぞ。早くしろ」

「はあ……本当にあなたたって人は」

「ありがとう小町さん。今度お礼するわ」

「いえいえー。じゃ頑張ってください!」

小町が手を振って見送ってくれた。雪ノ下と小町がなんか話してたが俺の知ることはないだろう。

Interlude・・・

あーあ。ほんとは行っちゃったな。ほんと二人ともめんどくさいんだから。

雪乃さんからお兄ちゃんを誘いに来るなんて思わなかった。凄

いオシヤレしてくるし。綺麗だったなあ。ほんと綺麗な人お兄ちゃんにはもつたいない。

お兄ちゃんも雪乃さんと話せて満更でもなさそうな顔をしてる。ちよつと照れくさそうに話してる。兄のこんな姿見たことがない。

兄のことをわかってるのは私だけだと思ってた。でも違った。もしかしたら私自身兄のことをわかっていないのかもしれない。それ以上に兄のことをわかってて大事にしてくれる人がいるのだという事実が嬉しかった。

だけど、少し。

——さみしいな。

安堵にも似た一抹の寂しさが頭から離れない。

『世界の猫展』が開催されているショッピングモールに着いた。猫展は一階の大きなスペースで開催されている。もうなんかにやーにやー聞こえるし、なんなら猫ノ下さんが隣で輪唱してるまである。

「雪ノ下はどんな猫が好きなんだ？」

「どんななんて、猫に貴賤はないわ。みんなちがってみんないいの」

「そうか。なら良かった」

「ど……どういう意味かしら？」

「いや、世界から集まってきた猫と触れ合える体験型イベントなんだろう？だからみんな好きならたくさん触れ合えるじゃないか」

「そつ、そうね。とにかく行きましよう」

頬を染めながら小走りで先頭に行く雪ノ下さん基アレノ下さん。

「やっぱりアメショーは可愛いわね。にやー」

「アメショー？」

「アメリカンショートヘアの略よ。可愛いでしょ？ねえ？アメショー？にやー」

「おつおう」

「アメリカンショートヘアは2種類の毛質をもつダブルコートでし

て、毛量ですが、長くまつすぐなオーバーコートは1本ずつ、短くて柔らかいアンダーコートは1つの毛穴から平均10〜12本生えているので毛の量も相当です。アンダーコートはお腹に向かって密集して生えてるんですよ」

と言いながらイベントの係員が近づいてきた。

「手入れが大変そうね」

その話を真面目に聞いていた雪ノ下。

「そうですね。抜け毛の季節だけでなく、日ごろからブラッシングをしてスキンシップをすることが大切ですよ。部屋に舞う毛を抑えられて、家族がアレルギーを引き起こす原因を減らすこともできます。猫は被毛からの感覚も敏感なので、あまり細かな目のコームでは嫌がる子や、幅広のブラシだとゾワゾワつとして苦手そうな子もいます。アメリカンショートヘアーなどの抜け毛の多い子は、ブラッシング嫌いにさせないように注意したいので、猫ちゃん好みのブラシを見つけてあげるのがポイントですね。」

「猫とのコミュニケーションや、スキンシップにもなりますし、それに彼氏さんと飼うんでしたら、お二人でケアしてあげると、ちよつとした癒しの時間にもなってラブラブ度がアップしちゃうかもしれないね♪」

は？

「そ……それは……」

「あつ、そちらの猫ちゃんはですね……」

爆弾を投下して係員は別の客のところに行ってしまった。

「そ……その……」

「す、すまん」

「い、いえ……別にあなたのせいではないわ」

ふと見回すと確かに周りはカッパルばかりだ。まあ、そういう関係だと思われても仕方がない。特に意味もないサービストークだったのだろう。

「そ、その……あなたはどの猫が好きなの？」

「おつ、俺か。そうだな。ペルシャ猫だな」

「なぜかしら？」

「金持ちって感じがするだろ」

「はあ……あなたって人は。長毛種で気難しげな容姿。運動量が少なく鳴き声も小さめ、温厚な性格を持っているから飼いやすいと聞いたことがあるけれど、ケアは大変なそうよ。時間とお金がかかるかもしれないのに専業主夫志望のあなたに飼えるのかしら？」

で、出たー。ちよつと優しいなって思ったら毒を吐くやつー。からかうような、少し嘲笑するように俺の目の底まで見通すかのように黒い瞳が輝いている。

「あー。それなら大丈夫だ。家庭的で夫を労わってくれて、献身的に養ってくれる人がいるから」

適切なことを言って逃げる。

「へえ。それは誰なのかしら？」

ふふつと笑いながら雪ノ下が問うてきた。その言葉と同時になぜか雪ノ下を見つめてしまった。

「さあ……誰だろうな」

特に雪ノ下が気にしてる様子がなかったので惚けたふりをする。

「それより腹減らないか？あつちに屋台があるぞ」

「ええ。私もちよつど何か食べたいと思っていたところだったの。あなたの話に乗るのは遺憾なのだけれど、今回はあなたの提案に賛成するわ」

「はいはい。行こう行こう」

ツンノ下さんの話を軽く受け流す。

「雪ノ下は何が食べたいんだ？」

「私はこのにやんにやん焼きそばにするわ」

全メニユーに、にやんにやんつて付いてる。にやんにやんにやんつてどつつかのスクールアイドルみたいで可愛いね！

「わかった。俺もそれにする。ちよつと買ってくるから待ってろ」

「ちよつと私も一緒に行くわ」

「いやいい……だつてお前その……疲れてんだろ」

「え？」

ここに来てからの雪ノ下はというとハイテンションでガンガンいこうぜ！的な感じだった。

「お前体力ないだろ。能力は高いけど……ま、待つとけ」

「わっ、わかったわ！待ってるから早く行きなさい。早く私の前から消えなさい！」

カア〜ツと文字が浮かび上がりそうなほど頬を真っ赤に染め、俺を消滅させようとする。

「はいはい。言われなくても行きますよ」

お怒りの雪ノ下に背を向け屋台へと歩を進める。

まあ、雪ノ下の額に見える汗が、純白でレースを思わせる珍至梅の花弁に滴る雨のように煌やかで、一瞬でも見惚れてしまったことは言うまでもない。

焼きそばなど適当に買い終え辺りを見回す。

「さてと、雪ノ下は——」

「ねえねえ？君一人？」

「……」

「二人なら俺たちとにやんにやんって一緒にブラッシングして猫と一緒に遊ばない？」

「……」

ナンパされていた。しかも意味からんことを言われている。お前達の都合に猫を巻き込むな。その時点でゆきのん的にポイント低いぞ。ほら、無言を貫いているが拒絶するような冷え切った目だ。

「おい！なんか言えよ！」

「……」

そう言っつて雪ノ下に襲いかかろうとするナンパ男。別に雪ノ下の身を心配しているわけではない。雪ノ下ならこんなヤツらの相手をするのは造作もないことだろう。だけど頭の中では思っついても体が、本能が、感情がどうしても言うことを聞かない。穢れを知らない何者にも染まらぬ『白』のような彼女の手を汚す訳にはいかないのだ。別に誰かが、誰かなら彼女を染めてもいいという事では決してな

いのだが……

「理性の化け物」だと言われたことがあるが、そんなもの今の俺を見たらあの人は何と言うのだろうか……少しだけ興味が湧いた。

「やめとけ」

「うおっ」

腕を掴み、払った。その拍子に後ずさるナンパ男二人。

「雪ノ下行くぞ」

少し強引に彼女の手を取りこの場から離れようとするが――

「なんだてめえ！待てよ。邪魔すんじゃねえぞ！」

やはり諦めてはくれないようだ。二人のナンパ男が前をふさぐ。はあ……普段の俺なら、日頃『腐った、死んだ魚のような目』と定評のあるこの目で静かに安全に事を終わらせるだろう。本当に事が無事に終わるかどうかわらんけど……一度崩壊した理性は留まることを知らない。

「どけー」

今まで一度も出したことのない咆哮のような鋭い怒声を響かせ、すごんでみせた。そのまま歩く。この前読んだラノベのお兄様の真似を試してみた。似てるかどうかは定かではないが俺たちの歩みを止める者はいない。かき分ける必要も無い。ただその場から離れた。

イベントスペースから離れて少し経ったあと雪ノ下が握っていた手を離れた。

「どうした？」

「……さっきのあなた怖かったわ。私の知ってるあなたではないよ  
うで怖かった。でも……ありがとう」

「悪かった。」

「本当に私はあなたのことを何も知らないのね……あなたに頼つてばかり。守ってもらってばかり……何一つ変わらない……」

拒絶の意思ではなかった。どこか儂げに俺を見据えて自分を戒めている。

「帰るか……」

普段は心地よいはずの静寂が棘のように心に突き刺さるのがいたたまれなくなつて歩きだす。その後を彼女が付いてくる。

ふと、彼女の足音が聞こえなくなったのを感じ振り返る。

彼女は何かを見つめていた。その先に視線を向けると――

クレーンゲームの景品があつた。その景品というのはパンダのぬいぐるみ。厳つい目が印象的なパンさんのぬいぐるみだった。前にも似たようなことがあつたのを思い出す。あの時と違うのはパンさんが浮き輪を付けてサマーバージョンになっていることだろう。やつぱりどの業界でも季節限定ものはあるのね……ガチャとか……ガチャとか……

それよりも、雪ノ下はあの日渡したぬいぐるみをどうしているのだろうか。その事が気になつたが聞くことはない。

「待ってる」

「えっ？」

不意に話しかけられ驚いている彼女をよそにクレーンゲーム機へと進む。今回は必殺技など使わない。さつきのお詫びとなんだかんだ楽しかった今日誘つてくれた札を兼ねているから。

野口さんが数枚消え去つたが何とか取ることができた。必死になつて格闘している俺を見て雪ノ下は笑つてた。すげー恥ずかしい。カッコつけて「待ってる」とか言つたのにこのザマだ。まあ、彼女の笑顔が見れただけ良しとしよう。取れたてホヤホヤのパンさんのぬいぐるみを彼女に渡す。

「ありがとう。大切にするわ」

ぬいぐるみをぎゅつと抱きしめて愛おしそうに微笑みながらそう言つてきた。

「さつきは悪かつた。それと……今日は――」

「待って」

「比企谷くん少し時間をくれる？」

俺の礼は彼女の発言で制された。別にまだ夕飯には時間があるし断る必要もないので答えは決まっている。

「ああ。どうかしたのか？」

「少し寄りたいたいところがあるの。さっき入ってきたところで待って  
てくれるかしら？」

「わかった。迷子になるなよ？」

「心配してくれてるの？」

「べつ、別にそんなんじゃないやねえし。ただ探すのが面倒だからであつ  
て……あー、もうじゃあな。待ってるからよ」

ちよつと弱みにつけこもうとしたらカウンをくらった。た  
ぶんというか絶対顔が真っ赤なので退散する。逃げるは恥だが役に  
立つね！

どれだけの時間がたったのか正確にはわからないが雪ノ下が袋を  
手に提げて戻ってきた。

「ちよつと歩きましようか？」

「ああ」

少ない言葉を交わし、橙に染まり始めた空に照らされる彼女の背  
を追うように歩き始める。

歩き始めて十分以上は経過しただろうか。雪ノ下が足を止めた。

「ここで少し休みましよう」

そう言つて人通りが少ない道から中に入った。そこは虫たちだ  
けの音色が響く公園だった。中に入ってすぐ雪ノ下が振り返つて俺  
の方を見てきた。

「比企谷くん。これ……姉さんから」

そう言いながら手に提げていたひとつの袋を手渡してきた。

「え？あ？おう」

「はい。どうぞ」

突然のことに頭が追いつかず変な返答をしてしまったが、特に弄  
られることもなかった。素直に受け取った。中身を確認する。

中に入っていたのはオシヤレに疎い俺でもわかる高級そうな腕時  
計と財布だった。それに加え手紙が……

『比企谷くん誕生日おめでとう。雪乃ちゃんの隣に居たいのならそれ



なりの物を身につけなさい。これは未来のお義姉さんからのあなたへの投資ね☆あと、登録してないと思うから電話番号とLINEのID教えとくね。追加しないとわかってるよね?」

日が沈んできたとはいえまだ暑い夏の日なのに寒気を感じて震えた。身体的にも精神的にも……。プレゼントは変哲も捻りもない普通のものであった。優しさに似たものを感じたが、この怪文書がなければ完璧だったのに……。やはり魔王はコワイ。というか別に俺は雪ノ下とそういう関係になりたいわけではないし、この安寧のポジションから離れるつもりもない。

「意外よね。姉さんが普通の物を贈るなんて」

「ああ、びつくりした。いろんな意味で……」

たぶん今の俺はちゃんと笑えていないだろう。

「そ……それからこれは私から……」

笑うしかない俺に、右手に提げてたもう一つの袋を差し出す雪ノ下。

「誕生日おめでどう比企谷くん」

そう言って彼女は微笑んだ。よく聖母のようだとか、何かあれば絵画のようとか表現されることがあるが、俺の語彙力では到底表すことのできない。そう思ってしまうほどに彼女の笑は美しかった。今までに会った女性よりも、今まで見てきたどんな笑顔よりも。

「中見てもいいか?」

「ええ、もちろん。」

許可を得てしっかりと誕生日の贈り物用に包装されていた箱を開ける。

「花の葉?」

「ええ。」

中に入っていたのは繊細に描かれた花が描かれている三枚の葉だった。

「左から順に、クレオメ、アンスリウム、アザレアという名前の8月8日の誕生花よ。」

「どうしてこれを?」

「あなた読書好きでしょ？というか読書しかしないものね」

「おい！読書は人並み以上にはする方だが”しか”は余計だ！”しか”は！」

「……ねえ……比企谷くん」

そう言っただけ俺の方に彼女が目を向けた瞬間、場が凍りついたような錯覚に陥った。夜が更けてきた冷たさなどではない。彼女の黒き瞳を見つめっていると、この場には俺たち二人しか存在しないのかと思えてくる。逃れられない。ひどく体が震える。そんな感じの冷たさだ。

「もう一つだけ本当に渡したいものがあるの。上手く言葉にできるかわからないけれど、受け取ってくれる？」

今にも消え入りそうな声音で俺に問うてくる。どうしたのだろう。こんな彼女を見るのは初めてだ。俺はこのあと何を言われるのだろうか……怖い。だけど、なんか聞き逃してはいけないような気がして、目を逸らしてはいけないような気がして、彼女を受け止めなければいけないような気がしたから。俺は――

「ああ……」

こう返すのが精一杯だった。我ながらひどいセリフだと思う。でも、俺はラノベやゲームの主人公じゃないからかつこいい言葉を返すことなどできない。ああ、こんな時主人公なんて言うのだろうか……そんなことを思っていたら、彼女は艶のある唇を開いた。

「クレオメの花言葉は『秘密のひととき』よ。いつもの紅茶をいれて、何気ない話をする時間。過言かもしれないけれどあなたの言葉は全部覚えてるわ。そんなどこにでもあるようなひとときをあなたとずっと過ごせますように……」

「アンスリウムの花言葉は『恋にもだえる心』。素直になれなくて遠ざけてきたこの宝物のような気持ち。あなたと見つめ合った瞬間この胸に溢れた優しい景色をずっと忘れませんように……」

「アザレアの花言葉はあまりこちらの意味では使われないかもしれないけれど、『恋の喜び』よ。今、あなたに惹かれている私がここにいらることを、あなたをそばに感じているこの想いをずっと覚えていられ

ますように……」

「この葉は道しるべ。あなたとずっと歩んでいけますように……この葉は目印。もし道に迷ったらまた新しい二人で未来を迎えにいきますように……」

「あなたとずっと一緒に居たい」

「あなたと一緒に景色ものがたりが見たいわ」

澱みも曇りもなく達観した夏の星空のように澄んだ黒。何者にも染まらぬ穢れを知らぬ白。それほどまでに熱い決意が見て取れる。

触れることなど許されないと思っていた。

関わることなど許されないと思っていた。

そんな彼女の、嘘偽りのない「本物」の彼女を知ってしまったから。この目で見えてしまったから。

雪ノ下雪乃は可愛いものが好きで、猫が好きで、おぼけと高いところが嫌いで、体力がなくて、方向音痴で、負けず嫌いで、自分が何者かなんてことに悩むような……普通の女の子だった。

途切れることなく想いを、言葉を紡いでくれた彼女にしっかりと向き合わなければ、今度は俺が伝えなければ……

「俺は——」

「待って。別に今答えを聞きたいわけじゃないの。だって、まだあなたのことを大切に想ってる人がいるはずだもの」

「だから、いつか、あなたの……比企谷八幡くんの気持ちを教えてください」

俺の覚悟は虚しく散ることになった。

だって、真夏の夜なのに粉雪がしんしんと降りてきてるのではないだろうかと錯覚してしまうほどに綺麗な笑を浮かべる彼女に見惚れてしまったから。

晩御飯の用意をしていると兄が帰ってきた。どこか満足げに少しはにかみながら……

あー、そっか。それだけ思った。

「たでーまー」

「おかえり。お兄ちゃん♪」

「おう小町。晩御飯はなんだ？」と言いながら席に着く兄。帰ってきて早々そんなこと聞くんだ……ほんと——

「お兄ちゃんが好きな小町特製肉じゃがだよ！」

「おおおおお！今日は本当に最高の日だな！」

「さあ……食べよ！」

夕食も一段落したところを見計らって言う。

「お兄ちゃんお誕生日おめでとう！」

「おっ、おう。ありがとな……なんか忘れられてるのかと思ったわ。やっぱり家族に祝われるのって嬉しいもんだな」

「忘れるわけじゃないじゃん！」

そう。忘れるわけじゃないじゃん。私は新しいものをあげることができるけど、『いつも』を添えることはできるから……誰にも負けないくらいの『いつも』をあげることができるから。

ねえお兄ちゃん。今日は素直になってもいいよね？

「お兄ちゃん。いつもありがとう」

私の言葉を聞いた瞬間。兄の体がビクツと震えた。目には涙らしきものが溜まって上を向いて、「あ、なんか目から水が流れてきた」とか言って誤魔化してる。ほんとお兄ちゃんはお兄ちゃんだなあ。

どう？私の素直な気持ち伝わったかな？でもね。これだけは口にはしないんだ。私の心の中に閉まっておくね。絶対に聞いても教えないから。

捻くれてて、不器用で、だけど優しく、真っ直ぐなお兄ちゃんのことか——

大好きだよ。